

平家物語佐佐木本について

西 海 淳 二

本書は一九七八年十一月、天理図書館善本叢書の第四十五巻及び第四十六巻として、八木書店より影印出版され、山下宏明氏の解説を付す。本書について渥美かをる博士は「覚一本を産むための基礎になった本、屋代本の古態を比較的忠実にうけついだ本」とされ、高橋貞一博士は「鎌倉本よりは後出と認むべきであり、百二十句本の如き八坂流本文の成立の基礎となったものといふべきであらう」とされる。上記の他にも論者は多いが、その差異は大である。そこで敢えて本書の特質を考えてみたいと思う。

本書の書誌は善本叢書に記されているのでここでは省く。次に各巻毎にその特質を記す。

二

○巻一

「平家一門繁昌事」では、「熊野参詣」「鱸」の記事がない。又左右近衛大将の記事も百二十句本とは異なり、鎌倉本、屋代本と同じ。百二十句本は覚一本に近い。

次に「白拍子義王佛等事」では、
舞スマシタリケレハ、皆人與ニ入テソ被思ケル、

君カ代ヲモ、イロト云鶯ノ声ノ響ソ春メキニケル、
ト歌イテ踏回リケレハ、

とあり、また今様の記事でも

月モ傾キ夜モ更テ、心ノ奥ヲ尋レハ、佛モ

とある。傍点部は八坂流の特質であろうか。

次に特異な詞章を示すと、嵯峨庵の記事に

角有ニ付テモ、不尽者ハ泪計也、普賢ノ筏ニ棹指テ、何彼ノ岸ニハ到ナン、過來シ方ノ事共ヲ思ヒ剉テ、泪ニソ
咽ヒケル、誰カレ時モ過ケレハ（中略）一一物を案スルニ、吾早晩嶮繫レテ生死ノ繼ニ可巡ニル浮世ノ苦ミノ輪
ヲ、娑婆榮華ハ小蝶ノ夢ノ楽ミ、今生ノ世俗ハ邯鄲ノ枕テ同ノ、難解難入ノ御法ノ声、耳ノ盤ニモ遠サカリ、楽
ミ榮テ何カセン

とあり、傍点部は本書のみであろうか。次にこの章の最後に、

皆往生ノ素懷ヲ遂ケルトソ聞エシ、入道佛ヲ失ヒ玉イ、諸国七道ニ手ヲ分テ寛メラレケル共無リ梟、淨海佛ハ一
定天狗ニ被捕タリトソ宣ケル、其後遥ニ程経テ聞被出ケル共、左様ニ世ヲ厭タラン者ヲ、中々兎角語ニ不及トテ
何ノ沙汰モ無リケリ、

とあり、大山寺本、屋代本に近いが、鎌倉本は傍点部がなく、百二十句本はこの記事がない。これは八坂流流動過程が一通りでなかった証左であろうか。この現象は以後の各巻にもみられるため注目すべきであろう。

「二條院崩御并皇太后御出家額打論」では、

蓮台野ノ輿船岡ニ収奉ル、少納言入道ノ子息澄憲法印ハ、御葬送ニ参リ逢ントテ山ヨリ被下ケルカ、早畑ト登ラセ玉フヲ見奉テ、泣々一首ヲ詠シケル

常ニ見シ君カ御幸ヲ今日間ヘハ還ラヌ旅ト聞ソ悲シキ

大宮今度モサマテノ事モ不在、此君ニサヘ別玉ヒシカハ、馳有御出家、近衛川原ノ御所ニソ移住セ玉イケル

とあり、傍点部は百二十句本、屋代本と異なる。鎌倉本は※印以降をこの章では欠き、卷六「高倉院崩御事」で記す。「常ニ見シ」の歌は千載集詞書には二条院の崩御の時とする。本書は千載集詞書を基にして鎌倉本詞章を改変したものであろうか。

また「後二條実白願申事」では鎌倉本に比して山王権現の御託宣がない。屋代本にもないが、これと関係があるうか。「日吉神輿入洛事并源三位頼政振舞事」では鎌倉本に比して本書は詳細。これは卷四「鵲」で記す。

以上より、本書は鎌倉本、百二十句本に比して屋代本に近いといへるか。諸本に比して簡略でもある。

○卷二

「内脇平宰相丹波少将被申願事」に、

大納言ノ侍共御所エ参テ少将呼出シ奉リ、上ハ西八条ニ今朝既ニ被押籠サセ給以ヌ、君達モ皆捕レサセ可給ト社承リ以ヘト申セハ、ナト夫程ノ事ヲ寄相ノ許ヨリ今マテ被告サルヤラント宣モ終ネハ使有何事ニテ候ヤラン
とあり、屋代本は傍点部が、鎌倉本は傍線部がそれぞれない。

また「新大納言出家并信俊有木別所参事」では、

新大納言成親卿ハ少シ寛意モヤト被思ケル処ニ、子息丹波少将已下鬼界嶋ニ流サレヌ、ト聞エシカハ、小松殿ニ

申上セ終ニ出家シ給臯

とあり、百二十句本と同じ。鎌倉本はこれに比して詳細。

また「成親禪門逝去事并慧星事」では、

此北方ト申ハ山城守敦賢ノ女也、眉目姿世ニ勝レ心様マテ優ナル人成シカハ、互ニ志不淺シ中也ケリ、若君姫君モ華ヲ手折關伽ノ水ヲ掬ミ父ノ後生ヲソ被訪ケル、哀ナリシ事共也。

とあり、さらに

同十二月廿四日慧星東方ニ出ツ、嗤尤旗共申、亦慧星共申ス、天下大ニ乱テ国ニ大兵乱起ト云リとある。百二十句本、屋代本はこれに近く、鎌倉本はこれらの記事がない。

したがって本書は、鎌倉本詞章形態と異なる。さらに章段配列を検討する。

(章段名は便宜上古典大系本表記による。)

覚一本	鎌倉本	百二十句本 佐佐木本 屋代本
大納言流罪	同上	同上
阿古屋松	同上	同上
大納言死去①②	同上①	同上①
徳大寺之沙汰	(後出) 康頼祝言①	(後出) 同上①②
山門滅亡	(後出)	(後出)

善光寺炎上

康頼祝言①②③

卒都婆流④

蘇武

なし

大納言死去②

同上③

同上④

康頼祝言③

卒都婆流②

同上

徳大寺之沙汰

なし

(後出)

(前出)

同上④

同上③

同上②

同上

大納言死去②

同上※

備考

①鬼界嶋流罪の事及び嶋の事

②成親死去の事及び北方出家の事

④康頼出家の事及び歌『つるにかく』の事

③康頼・成経・熊野詣の事

③康頼祝言の事

④龍神化現の事

②卒都婆流の事

※屋代本は欠く

本書等三本は章段記事の配列はほぼ同じであるが、詞章は若干異なる。「徳大寺之沙汰」は八坂流本では巻末に置くのが常であろうか。屋代本は誤脱したものか。

以上、この巻で本書は鎌倉本と異なり、八坂流流動過程が一樣でなかったことを示す伝本であり、百二十句本、屋代本成立過程を考察する上で注目すべきであろう。百二十句本、佐佐木本、屋代本は同類本であろうか。

○巻三

「有王嶋渡同僧都逝去事」では、

平家物語佐佐木本について

僧都ノ雅ヨリ不便ニ召仕レケル童二人有、名ヲ有王亀王トソ申ケル、兩人共ニ明テモ暮テモ主ノ事ヲ耳歎ケルカ、其思ノ積ニヤ亀王ハ無程死ニ梟、有王ハ未有ケルカ、

とあり、百二十句本、屋代本と同じ。鎌倉本は有王のみ記し、傍点部はない。さらに、

「雨風厭ヘフモ無シ、是社我家ト指入テ打臥玉ヘハ、膝ヨリ下ハ彰也、昔ハ法勝寺ノ

とあり、屋代本にもある。また姫御前の歌に、

是見ヨ有国此子カ文ノ書様ノ拙サヨ

七夕ノ海士ノ釣舟我ニカセハ重ノ塩路ノ父ヲ迎エン

とあり、これは百二十句本と同じ。

また「入道相国奉恨朝家事」でも、

其時入道法印呼トテ被出ケリ、稍法印ノ御房克々聞玉ヘ、淨海カ申処僻事カ、先内府カ加様ニ罷候ヲ、御刃ノ心ニモ推察シ玉ヘ、入道カ心中有ニ不在候テ、悲涙ヲ推テ、一日ミト送過候、保元以後ハ乱逆打続キ、君安キ御心モ渡ラセ玉ハサリシニ、入道ハ只大方執行及ニ社候ヘ、内府身ヲ碎テ度々ノ逆鱗ヲハ安メ進テ候ヘ、其外臨時ノ御大事朝夕ノ政務内府程ノ切臣難有覚候、是ヲ思フニ唐ノ太宗ハ後レ巍嶽ニ悲ノ余ニ、昔段宗ハ夢ノ夢ノ中ニ得良弼ヲ、今朕ハ悟ノ後ニ失ト賢臣ヲ云碑ノ文ヲ自書テ彼廟ニ立テ社悲ミ給ケレ、吾朝ニモ親見進セシ事ソカシ、顯頼民部卿カ逝去シタリシヲ、故院殊ニ愁悲シ玉イテ八幡ノ行幸引延シ御遊無リキ、惣テ臣下ノ損スルヲハ代々ノ帝御歎有事ニテ社候、其ニ内府カ中陰ニ八幡ノ御幸成テ御遊有キ、

とあり、百二十句本、屋代本と同じ。鎌倉本は傍点部がない。だがこれに続く清盛の言葉は鎌倉本、百二十句本とも異なり、覺一本に近い。

次に「園城寺頼豪事并西京座主祈之事」は、
皇子ナレハ、取奉テ魔道ヘ社行ノトテ対面モセサリケリ、匡房婦參テ此由ヲ奏シケレハ、頼豪聽テ于死ス、主上
如何セント大ニ竜顔ヲ駭シ在ス、基季御悩付セ給テ様々ノ祈共有シカトモ可叶不見給、白髮成ケル老僧ノ錫杖持
テ、抑枕ニ佇テ、人夢ニモ見エ幼ヒ幻ニモ立ニ臬、王子終ニ御歳四歳ニテ
とあり、鎌倉本、百二十句本に近い。屋代本は本書に比して簡略。

また「奉公卿流事」では、

丹波国村雲ト云所ニソ暫休ヒ給ケル、後ニハ尋出サレテ信乃国ヘソ被流玉フ、前関白松殿ノ侍ニ江大夫判官遠業
ト云者在、是モ平家ニ不リ快カラケレハ、六波羅ヨリ己ニ寄テ擲取ヘキ處ニ子息江左衛門尉業打具ノ、焉共無落
行ケルカ稲荷山ニ打上リ親子云合ケルハ、東国ノ方ヘ落下伊豆国ノ流人前右兵衛佐頼朝ヲ憑マハヤトハ思ヘ共、
夫モ當時勅感ノ人ニテ身一身難叶御坐也。日本ニ平家ノ庄園ナラヌ所ヤ有、手来栖押タル所ヲ人ニ見ンモ、恥カ
マシカルヘシ、只是ヨリ還テ六波羅ヨリ召ノ使アラハ、腹搔切テ死ンニハ不如トテ尾坂ノ宿ヘ取テ反ス、如案ノ
六波羅ヨリ源大判官季貞摂津判官盛澄三百余奇ニテ押寄時ヲ動トソ造ケル、江大夫判官縁ニ立出、是御覽候ヘ各
六波羅ニテ此様申サセ玉ヘト、館ニ火ヲ掛父子共ニ腹切テ炎ノ中ニテ焼死ニケリ、抑加様ニ
とあり、鎌倉本、百二十句本と同じ。屋代本は傍線部がない。
以上、この巻では鎌倉本に近いが、同時に屋代本とも近い。したがって本書と屋代本とが同類本（卷ニ参照）と
すれば、本書に比して、屋代本は簡略、省略がきわめて多い。屋代本は本書より後出本であろう。即ち、屋代本の
簡略は流動過程における現象と考えられる。「奉公卿流事」の屋代本詞章は、流動過程における誤脱と認むべきで、
屋代本を増補することにより諸本詞章が成立したと考えられようか。

○卷四

屋代本はこの巻欠く。百二十句本に比して本書の記事の有無を示すと、「安德天皇踐祚事」の弁内侍、「新院嚴島御行幸」の歌雲井より、同二十九日条以後、「高倉宮御謀叛事」の熊野別当湛増の各記事がない。鎌倉本も同じ。また「高倉宮南都入御事」「頼政射變化者事」は注目すべき章である。

「新院嚴島御行幸」は鎌倉本と同じく『嚴島御行記』によったものであろう。また「法皇上皇対面」は鎌倉本、百二十句本にあるが本書にはなく、さらにこの記事に続く「廿六日から五日の条」でも本書は鎌倉本よりはるかに簡略。鎌倉本は百二十句本より簡略。これは誤脱か平曲の影響かであらう。鎌倉本を簡略にすれば本書にならうか。同例として「同法皇自田中殿烏丸御所御幸事」の章がある。

次に「伊豆守仲綱馬事」で、伊豆守の歌に

恋シクハ来テモ見ヨカシ身ニ副ル木ノ下、カケヲ放スヘキカハ、

とあるが、傍点部諸本は、

かけをはいかゝはなちやるへき

とある。また「競残留」の理由として、

宿所ハ六波羅重松牆ノ内也、平家ニモ兼參ノ者也ケレハ

とあり、鎌倉本と同じ。百二十句本はこれとは異なり、

きおうかはせをくれて、とゝまつて候よし

とある。またこの章の最後に、本書は、

南廷カ參テ候ト申ハ、宗盛急出テ見給ヘハ、散々ノ事ニテソ有ケル、昔ハ南廷今ハ平宗盛入道ト云鑠ヲソシタリ

ケル、太政入道大ニ怒テ

とあるが、傍点部百二十句本は宗盛とある。したがって本書はやはり鎌倉本に近いといふべきであろう。

「菖蒲前」は、太平記卷廿一「高師直」覚一検校の平家琵琶を聴聞する条^③にもあり、注目される。

「鶴」の章は巻一「御興振」と共に考える必要があろう。そこで巻一「御興振」の記事を一覧で示すと、

記事	覚一本 百二十句本	鎌倉本	佐佐木本 屋代本
大衆僉議 頼政源氏嫡統 歌道の達者 二条院時の鶴退治 歌五月闇 歌深山木ノ 名歌仕る艶男 神興昇返す事	○ ○ ○ × × ○ ○ ○	○ ○ × × × ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

ここで注目すべきは『二条院時の鶴退治』の記事である。即ち、

①屋代本とは同詞章であること。

②この章に『鶴退治』があるのは長門本以外では本書と屋代本であること。

③この『鶴退治』は巻四にもあること。

等である。これより推測すると、この章では覚一本の如き、「鶴退治」がなく歌道の記事のみが古態であり、本書

は覚一本に比して「鵠退治」がある点で後出であろう。もし本書、屋代本の如きが古態とするならば、記事の重複がなぜ生じたのか。さらに諸本の多くにこの重複がみられるはずであろう。記事の重複は特異な現象である。本書に比して鎌倉本詞章は、八坂流の古態解明上の資料として注目される。

次に巻四「鵠」の記事一覧を示す。

記事	覚一本	鎌倉本	百二十句本	佐佐木本
近衛院の事	○	○	○	○
頼政勅定	○	○	○	○
雅頼卿奏聞	○	○	×	○
鵠退治	○	○	○	○
連歌（はとときす）	○	○	○	○
菖蒲前	×	○	×	○
二条院の事	○	○	○	○
雅頼卿奏聞	○	○	×	○
鵠退治	○	○	○	○
連歌（五月闇）	○	×	○	×

ここで注目すべきは『雅頼卿奏聞』の記事異同である。この章は頼政の高名をその死後、紀伝体で記すことを考えると、「鵠を射るのを失敗すれば、恥辱を与えた雅頼を射よう」とする頼政は、二条院時より近衛院時の方が妥当であろう。諸本により脱漏あり、増補ありするのは、琵琶法師の語りによる流伝の結果である。特異な詞章もここから生じたものであろう。したがって、本書の詞章は八坂流流動過程における一現象といふべきであらうか。^⑤

以上より、本書は、鎌倉本より後出というべきか。

○巻五

「大庭早馬以頼朝謀叛注進事」では鎌倉本、百二十句、屋代本に比して本書は極めて簡略である。また「文覚房神護寺勸進帳事」では諸本に比して本書は詳細である。本書の両章は特異な詞章であろう。「南都滅亡事」も同様か。

この巻では諸本に比して、本書は特異な詞章である。それは流動過程における増補と省略とが繰り返されたということであろうか。これは諸本に比して簡略な本が古態であるとはいえないことを示すものであろう。

○巻六

「花林院僧正栄円逝去事」では

治承五月正月一日、新玉ノ年立婦タレトモ内裏ニハ東国ノ兵革南都ノ火災ニ依テ、被止朝拝主上出御モナシ、物音モ不吹鳴舞楽モ不奏吉野ノ国栖モ不参、二日殿上ノ宴酔モナシ、男女打ヒソメキ禁中不楽ソ成ニケル、同四日南都ノ僧綱闕官シテ被停公請、
とある。鎌倉本はこれより詳細で、

治承五年正月一日、内裏ニハ東国ノ兵革南都ノ火災ニヨテ朝拝被停、主上出御モ無、物ノ音モ吹不鳴舞楽モ奏セ
ス、吉野ノ国栖モ不参、藤氏ノ公卿一人モ不被参、氏寺焼失ニヨテナリ、二日殿上ノ宴酔モ無、男女打咽テ禁中
忌益ソ見ヘケル、佛法皇法共ニ尽ナル事ソ浅益キ、一院仰成ケレハ、吾十善ノ余薰ニヨテ万乗ノ宝位ヲ保ツ、嗣
代ノ帝王ヲ思ニ子也、孫也、如何ナレハ万機ノ世務ヲ被停テ歳月ヲ送覧トソ御歎有ケル、五日南都ノ僧綱等解官
ラレ公請ヲ停止シ所職ヲ被没収、衆徒ハ老タルモ少キモ、或討攻切攻シ、或烟ノ中ヲ出ス炎ニ咽多ク亡シカハ、

僅ニ殘輩ハ山林ニ交リ、迹ヲ留ルハ一人モ無、興福寺別当花山院ノ僧正榮円ハ

とあり、屋代本とは詞章上は同じであるが、記事配列は異なる。流動過程による差異であらうか。これに関して、岩波古典大系上三八七頁校異7、衆徒は——〔屋〕コハ、文ナシ。とあるが、これは誤記。

また「高倉上皇崩御事」では上皇の生前を評する記事及び御送葬の記事の一部がない。屋代本も本書に同じ。次に「木曾冠者義仲於信州謀叛事」では、

木曾仲三兼遠カ、許ニ行テ、是育テ人ト成テ見セ玉ヘト云ケレハ、兼遠甲輩々シクモ請取テ廿余年養育ス、漸々長ナル俛ニハ、武略ノ心猛クシテ弓馬ノ道勝レタリ、常ハ如何ニモシテ平家ヲ滅シ、△△中略▽
木曾意最猛ク成テ、根井太郎、大滋野行近ヲ始トシ、國中ノ兵ヲ語ニ一人モ△中略▽兄弟共ニ多勢ノ共之討手進セヨト仰下シタラ、スルニ、ナトカ討手進セサルヘキト宣ケレハ、実モト云人モ有、イヤ／＼大事ニ及ナンスト私語有モ多カリケリ

とあり、鎌倉本は△部に「木曾挙兵の志」が、△△に「木曾元服」がある。

「入道浄海病患事同被薨事」では、本書は鎌倉本と異なり、屋代本と同じく「河野通信入道西寂合戦」がない。また「入道病状」でも諸本に比して本書は簡略で、西八条焼失や酒宴ではさらに諸本と異なる。

「五条大納言邦綱逝去事」では屋代本と同じく如無僧都の三歳の時の事がなく、また邦綱の母夢占もない。独立した説話であるため誤脱したものか。この他鎌倉本、百二十句本との差異を示すと、「東大寺造営事」に長恨歌がなく、「須俣川合戦事」でも記事配列が異なる。これらは屋代本と同じ。

また「平家祈不成就事」でも本書は鎌倉本、百二十句本と異なり、実玄阿闍梨の平氏調伏注進の理由がない。これも屋代本と同じ。

以上より、諸本異同が甚大であることが判明した。本書は鎌倉本、百二十句本に比して屋代本詞章に近い。

○卷七

冒頭に「朝覲行幸事」がある。これは一方流諸本が、この章を卷六卷末に置くのに対し、八坂流諸本の特質である。

「木曾与兵衛佐不快事」では、

其比木曾次郎義仲、右兵衛頼朝ト不快ノ事出来テ、兵衛佐ハ討トテ木曾ヲ、六万余奇ニテ信濃ニ発向ス、木曾聞之、乳母ノ以今井四郎兼平ヲ、依テ何事ニ、義仲ヲ討ントハ候ヤラン、但十郎藏人殿社貴辺ヲ恨事有トテ、是ニ坐タルヲ、義仲サヘ無情モテナシ申サン事、如何ソヤ、サレハ当時ハ

とあり、鎌倉本に比して甚だしく簡略。百二十句本、屋代本と同じ。鎌倉本は覚一本と同じ。

次に「木曾義仲於垣生若宮願書事」に

雲ノ中ヨリ鳩ニツ飛来テ、翻翻ス源氏ノ白旗ノ上ニ、平家はヲ遠見ノ、皆身ノ毛豎臬、昔神功皇后攻新羅ヲ玉イシニ、靈鳩頭レテ炎中ニ飛超ス、旗上ニ加様ノ先蹤ヲ思剉テ、義仲唯今脱甲、拜靈鳩ヲ給ヒケル心ノ中社憑シケレとある。これは鎌倉本に比して傍点部は誇張表現となり、傍線部と呼応していると考えられ、本書の成立過程考察上注目すべきであらう。

また「砥並山黒坂志保坂篠原所々軍事」は、

次第ニ暗フ成シカハ、搦手ノ勢一万余奇、平家ノ陣ノ後ナル久里加羅堂ノ辺ニテ、廻合、久里加羅堂ノ前ニテ、一万余奇策之方立ヲ打敲キ、天モ響キ大地モ動ス程ニ、楚譚ヲ動トソ作ケル、木曾聞之ヲ、とある。鎌倉本と異なり、百二十句本、屋代本と同じ。一方流諸本はこの章の次に「篠原合戦」がある。八坂流本

でこの記事があるのは鎌倉本のみ。

次に「齊藤別当実盛討死、同錦介直垂着事」では、

平家去ル四月ニ北国ヘ下向ノ時八万余奇ト聞エシカ、今五月ニ逃上ニハ、僅ニ其勢三万余奇、指モ華声ニ出テ都ヲ出シ人々ノ徒ニ名ヲ而已残シ、越路ノ末ノ塵ト成社悲シケレ、入道ノ末子三河守知度モ討レ玉イヌ、忠綱景高モ不帰、季国長綱モ討レヌ、尽流ヲ、漁則雖得多魚ヲ、明年ニ無魚、焼林狩則雖得ト多獸ヲ、明年ニハ無シ獸、後ヲ存ノ少々ハ可被残者ヲト申人モ多リケルトカヤ、飛彈守景家ハ最愛ノ嫡子景高討レテ歎ニ沈ミケルカ、頻ニ出家ノ暇ヲ申間、大臣殿被許ケニ、則打臥事十余日有テ、遂ニ思死ニソ死ニケル、是ヲ始テ、

とあり、傍点部は鎌倉本に比して増補である。百二十句本、屋代本と同じ。また傍点部は「砥並黒坂志保坂篠原所々軍事」に

上総太郎判官忠綱、飛彈太夫判官景高、河内判官秀国モ此谷ニテソ死ニケルとあるのと重複する。

また「木曾義仲山門牒状事、并返牒事」の最後に、鎌倉本は、

寿永二年七月五日、敬白、ト被書タル、貫首是ヲ愍給テ、軀テ不被披露、十禪師御殿籠テ三日加持ノ後被披露、始ハ有トモ見ヘサリツル一首歌、願書ノ表卷ニ出来リ、

平ニ花サク宿モ年経ハ西ヘカタフク月トコソナレ

山王大師愍ヲ垂給三千衆徒力ヲ合ヨト也、

とあり、百二十句本と同じ。本書、屋代本はない。この記事は前後の記事より推測するに誤脱したものであろう。とすれば、本書よりも百二十句本の方が前出であろう。岩波古典大系本補記13では、百二十句本についての記述が

ないのはどうしたわけか。

次に巻後半の章段配列を示すと、

覚一本 鎌倉本	百二十句本	佐佐木本 屋代本
主上都落 維盛都落 聖主臨幸 忠度都落 經正都落 青山之沙汰 一門都落 福原落	同上 忠度都落（歌有） 經正都落 青山之沙汰 同上 同上（都焼失） 一門都落（教盛） 聖主臨幸（送還） 一門都落（小松殿） 《前出》 《前出》 《前出》 同上	同上 同上（歌なし） 同上 同上 同上（都焼失） 同上（教盛） 同上（送還） 同上（小松殿） 《前出》 《なし》 《なし》 《前出》 同上

※章段名は便宜上岩波古典大系本による。

以上、この巻は詞章、章段配列ともに屋代本と同類であろうか。即ち、本書、屋代本は百二十句本よりも後出と

いうことか。

○卷八

「新帝御即位事」で本書は覚一本に比して禁中落書、範光正三位叙位がない。八坂流本の特質であろう。

「安徳天皇御宇佐行幸事」の九月十三夜の条に、

九月十三夜ハ殊ニ名ヲ得タル月ナレト、其夜都ヲ思出ル泪ニ、吾カラ陰テ亮ナラス、九重ノ雲ノ上、久堅ノ月ニ思伏シ類モ今ノ様ニ覺テ、

①修理太夫経盛

恋シトヨ去年ノ今夜ノ終夜契シ人ノ思出ラレテ

②左馬頭幸盛

君住ハ爰モ雲井ノ月ナレト猶恋シキハ都ナリケリ

③薩磨守忠度

月ヲ見シ去年ノ今宵ノ友ノミヤ都ニ吾ヲ思ヒ出ラン

④皇后宮亮経正

分テ越野辺ノ露トモ消スシテ思ハヌ里ノ月ヲ見ル哉

とある。これらの歌の配列は諸本ではどうか、示すと、

覚一本 百二十句本	鎌倉本	佐佐木本	屋代本
③	①	①	③

④	①			
④	③			
④	③	②		
			②	

となり、左馬頭幸盛の歌が本書以外では、屋代本にあるのは注目すべきであらう。

次に「播磨室山合戦事」では、

平家ハ陣ヲ五ヶ所ニ張ル、先陣越中次郎兵衛盛繼三千余奇、暫相對様ニテ持成テ中ヲ雑ト開テ通ス、二陣伊賀平内左衛門家長二千余奇、同ク開テ通シケリ、三陣上総五郎兵衛忠光惡七兵衛景清二千余奇、共ニ開テ通シケリ、四陣本三位中将重衡卿モ開テ被入梟、一陣ヨリ知盛卿一万余奇マテ兼謀シ合図ナレハ、敵ヲ中ニ取籠テ、前後一度ニ時ヲ動トソ造ケル

とある。屋代本は本書に比して極めて簡略で、

一日戰暮ス、サレト平家ハ多勢、御方ハ無勢ナリケレハ、散々ニ打散サレテ、引退クとある。鎌倉本は本書に近い詞章であるが傍線部は、

四陣本三位中将重衡卿三千余騎、五陣新中納言朝盛卿一万余騎ニテ固ラル、十郎藏人行家五百余騎ニテ懸ク、越中次郎兵衛盛次暫相様ニ持成テ、中ヲ雑ト開テ通ス、一陣ヨリ五陣左右兼テ約束為タリケレハ、と詳細である。もし屋代本が諸本中で古態であるならば、屋代本詞章から鎌倉本及び本書が成立し得るであらうか。この巻でも八坂流諸本は、流動過程で簡略化されたとみるのが妥当であらう。即ち、鎌倉本——佐佐木本——屋代本と流動した、と考えるべきであらう。

本書は「法住寺合戦事」の信濃次郎仲頼、「本曾停官職事」の義経上京では屋代本と異なり鎌倉本と同じ。

○卷九

「東国勢上事同生済摺墨事」で、

佐々木此御馬ヲ給テ御前ヲ罷立テ、余ノ嬉シサニ打泪クンテ申ケルハ、身ハ為ニ思ノ仕へ、命ハ依義輕ト申事候、此御馬ヲ給乍宇治川ノ先陣人ニセラレテ候物ナラハ、軍ニモ不可合又兩タヒ鎌倉ニ下參給マシク候、軍ニハ無子細合タリト被聞召ハ、宇治河ノ先陣ハ為ツラント被思食候へ、ト申切テ御前ヲ立、參会シタル大名小名各皆広涼ノ申様哉ト私語敢リ

とあり、覚一本より詳細で八坂流本の特質であらう。

「敦盛討死事」では

亦奉助タリ共、勝軍ノ負ル事ハ世己非、^{※1}奉助ト思ヒ後ヲ急ト見ケレハ、土肥梶原五十奇計劃タリ、熊谷泪ヲ按テ申ケルハ、扶進セント存候へ共、味方ノ勢如雲霞候へハ余モ延シ進セ候ハシ、人手ニ懸進ンヨリハ同ハ直実カ手ニ懸進セテ后ノ御孝養ヲ杜仕候ハメト、申ケレハ、疾々頸ヲ捕トソ宣ケル、熊谷余ニ最惜テ目モ闇心モ消終テ、焉ニ刀ヲ可立トモ不思、前后不覚ニ覚エケレ共、楮シモ可有事ナラネハ泣々御頸ヲソ搔テケル、^{※2}鐵直垂ヲ取テ頸ヲ包マント為ケレハ、錦ノ袋ニ入タル笛ヲソ腰ニサ、レケル、穴糸惜ヤ、

とあり、覚一本とは異なり、※1、※2に直実の感情表現がない。鎌倉本、百二十句本には、「熊谷経盛往復文」がある。

本書は鎌倉本、百二十句本よりも簡略化されたものか。

○卷十

「於一谷討平氏頸大地被渡事」では、

ト申セハ、北方糸惜ヤ、其モ只吾等カ事ヲ思歎玉フカ、病玉ヒタルニ杜如何ナル勞ヤラン、不審ヤト宣ハ、若君姫君ノ御勞トハ問ハサリケルトソ宣ヒケルソ哀ナル、齊藤五、身討タニモ忍カネテ候者カ、何ノ御勞ナント迄ハ、争カ問候ヘキト申セハ、北方実モトテ泣玉フ

とあり、百二十句本、屋代本と同じ。鎌倉本は本書に比して、北方の心情は詳細であるが、傍点部はない。同例として「維盛故郷音信事」がある。

「重衡大地被渡事同三種神器屋嶋仰下事」では

同十四日、本三位中将大地ヲ被渡、小八葉ノ車前後見ヲ揚タリ、藍摺ノ直垂ニ折烏帽子也、土肥次郎実平木蘭地ノ直垂ニ火威ノ鎧着テ、三位中将ノ同車シ奉ル、随兵六十余騎具シテ守護ス、六条ヲ東へ被渡玉フ、見ル人泪ヲ流シ、哀ヤ此人ハ入道殿ニモ覚ノ御子ニテ一門ノ人々ニモ被賞、院内エ参玉フニ

とあり、※部以外では百二十句本、屋代本と異なり鎌倉本に近い。鎌倉本は※印に人々の心情を記す。したがって本書の成立には、鎌倉本の影響があったと認むべきであろう。

またこの章「法皇への請文」では、

三種神宝、可放タセ給玉躰ヲ、曩祖平將軍貞盛相馬小次郎將門ヲ追討セシヨリ以来、代々奉ル守リ禁闕朝家ヲとあり、屋代本と同じ。※1、※2には鎌倉本、百二十句本共に長文がある。

さらに「頼朝重衡対面并千寿前事」でも本書は鎌倉本、百二十句本と異なり、「千寿往生」がない。屋代本もない。又注目すべき章としては、

「維盛高野山并熊野参詣同入水事」

「池大納言鎌倉下向事」

がある。

以上により本書は、鎌倉本、百二十句本が流動過程で簡略化されて成立したものと考えられよう。

なお、岩波古典大系本校異補記20に

〔平・竹・鎌・百・中・国〕ハ「源平みたれあひ……」ノ文ヲ欠カズ、ソノ下ニコノ話ヲ入レル、コレハ〔寛〕及ビ一方流系ニハナイ。八坂系諸本ノ特徴トスル所デアル

とあるが、傍点部は誤記であり、傍線部は今後の検討課題である。

○卷十一

この巻では、本書は寛一本詞章と異なり鎌倉本、百二十句本と一致する章が多い。

「阿波国勝浦合戦事」

「阿波田内左衛門範義降人出事」

「浅利与一義成射遠矢事」

「宝劔事」

などがそれである。

「範頼義経院参事」の冒頭に

元暦二年正月十日、参川守範頼、九郎判官義経両人院御所エ参テ、以大蔵卿泰経朝臣ヲ被申ケルハとあり、両名が院参とあるが、これは本書だけであろうか。鎌倉本、屋代本は義経一人が院参とある。

次に「生捕事」では、平大納言ノ北方師典侍の歌として、

①詠レハヌル、袂ニヤトリケリ月ヨ雲井ノ物語セヨ

②雲ノ上見シニカハラヌ月影ノ澄ムニ付テモ物ソ悲シキ

大納言典侍局

③吾身社明石ノ浦ニ旅寝セノ同浪ニモヤトル月哉

泣々口説給ヘハ、九郎ノ判官モ東男ナレ共優ニ艶アル心チシテ、左社昔恋シク物悲シク物在ラメ、ト身ニ知テ哀ニ被思ケレハ、横笛取出シ朗詠シテ、終夜慰メ被申ケリ、

とあるが、鎌倉本、百二十句本、屋代本は②③の歌がなく、本書に比して簡略である。本書は覚一本に近いが、この記事の前後は鎌倉本、百二十句本、屋代本に近い。

「副將軍義宗事」では

大臣殿、判官ノ許エ被宣遣ケレハ、此程関東エ可下ト承ル、偕ハ虜ノ中八歳ノ童ト注レタリシ者ハ、未此世ニ候ラハ、関東下向所ニ、今一度見候ハヤト、被宣遣タリケレハ、判官安キ御事候トソ宣ケル、若君ヲハ介錯ノ女房二人被付ケル、此女房達若君ヲ中ニ奉置、終ニ如何ナル御有様ニカ見成シ進センスラン、トテ朝夕只自泣外ノ事ソ無キ、判官、河越小太郎カ許エ此様ヲ

とあり、百二十句本、屋代本とはほぼ同じ。鎌倉本に比して詳細である。また副將離別では、亦明日可參ト宣ヘ共、猶モ不立給、二人ノ女房共、寄テ懷立奉リ、車ニ乗セ進セテ出セハ、大臣殿とあり、傍点部は鎌倉本に比して簡略。

八坂流諸本はこの章で巻を終るが、本書は「重衡被渡南都被誅木津事」で終る、覚一本と同じ。

「前内大臣宗盛父子関東下向并親子被刎首事」では、

吾妻ノ終遠國ノ外夷カ住ナル千嶋ナリ共ト、宣ケルソ淺益キ、栗田口四宮川原松坂ヲモ打過ミ、逢坂山越行ハ、

都ハ跡ニ隔リス、関清水ニテ駒ヲ整テ

都ヲハ今日ヲ限ノセキ水ニ暫名残ノ歌ヤ移サン

昔ハ名而已聞シ海道ノ

とあり、傍点部は鎌倉本、百二十句本、屋代本と異なる。鎌倉本はこの章に「腰越状」がある。

以上この巻は、一方流諸本に比して、本書は八坂流本の特質を明確にしている。また本書は鎌倉本と異なり、百二十句本、屋代本に近い詞章もあり、さらに覚一本に近い記事もある。平家物語流伝の複雑さを示す巻である。

○卷十二

巻頭は覚一本同様「大地震事」である。この章は鎌倉本とはほぼ同じ。続いて諸本に「九郎判官任伊予守改義経成義顯事并源氏数輩受領事」があるが、百二十句本にはない。

「義朝首鎌倉下事」は鎌倉本、屋代本にはなく、本書は百二十句本詞章と一致する。

次に「平家生捕国々流罪事」では、

時忠コウソ詠玉フ

白浪ソ打驚カス岩ノ上ニネイラテ松ノ幾世経ヌラン

常ニハ歌詠詩作、鄙ノ栖モ中々ニ都ニ替有様ヲ、ヨスカト慰ミ給フ、昔平相国清盛天下ノ政ヲ此郷ニ被仰合ケレハ、諸事心ノ任ニ、家内楽テ肩ヲ双ル人モナシ、懸ル目出度事共思出フニモ、今一人ノ悲ミニ、袂ノ于隙モナシ、此ノ彼配所ニテ、終ニ無墓成玉フ

とあり、傍点部は本書だけであろうか。傍点部以外は鎌倉本、百二十句本、屋代本と同じ。

次に「大佛供養并薩摩中務悪七兵衛事」に

悪七兵衛景清ハ、西国ノ軍ヲ通テ後東タ西タニテ頼朝を射奉リケルカ、射兼テ如何カ思ケン、隣人ニ參ケルヲ、和田左衛門尉義盛ニ被預、景清昔ノ心ヲ不失、慢テ左衛門尉ニ座上シタリ、盃ヲ先ニ飲タリ、梃ヨリ馬ニ乗下シケレハ、義盛持療テ、此由鎌倉殿ニ申ス、サラハトテ和田四郎左衛門尉友家ニ被預、后ニハ出家シタリケリ、三月十三日、大佛供養ト聞シカハ、奈何カ思ケン、七日先立テ、不呑湯水ヲモ、供養ノ日、死ケル杜怖シケレトある。本書は、鎌倉本をやや簡略化させた詞章といふべきか。

また「為伊与守義顯討手土佐房冒房上洛事」「堀河宿所夜討事付冒俊被誅事」は鎌倉本に近く、百二十句本、屋代本に比して簡略である。「文覚上人隱岐国配流事」は鎌倉本とは異なり、百二十句本、屋代本に近い。以上この巻は鎌倉本及び百二十句本を簡略化させた詞章と認められよう。

三

本書は鎌倉本系統本を基に、増補、簡略化、誤脱などによる改編が繰り返され、さらに百二十句本系統本の影響も受けつつ成立したもの、と推定すべきであろう。

また本書と諸本との比較検討を通して、岩波大系本校異及び補記の不備も若干訂正できた。

ここに資料として示した諸本は、高橋貞一博士『平家物語諸本の研究』の分類による八坂流甲類本を中心に、一方流、八坂流の相互関係から覚一本も加えながら比較検討したが、これらの諸本は平家物語伝本の代表的なものである。今後さらに新資料の発見検討を続けねばならないが、本稿は八坂流諸本成立順序としては、

鎌倉本→佐佐木本→屋代本

百二十句本

となろうか。

註

① 『平家物語の基礎的研究』（昭和三十七年三月、三省堂刊。同五十三年七月、笠間書院再刊）六十五頁以降参照。

② 佛教大學人文論集第十四号収録「佐佐木博士旧藏平家物語について」

③ 『太平記二』（昭和三十六年六月初版、岩波書店刊）で示すと、

（前略）或時月深夜閑テ、荻葉ヲ渡風身ニ入タル心地シケル時節、真都ト覺都檢校ト二人ツレ平家ヲ歌ケルニ、近衛院ノ御時、紫宸殿ノ上ニ鶴ト云怪鳥飛来テ夜ナ夜ナ鳴ケルヲ、源三位頼政勅ヲ承テ射テ落シタリケレバ、上皇限ナク歎感有テ、紀ノ御衣ヲ当座ニ肩ニ懸ラル（後略）とある。三四九頁以降参照。

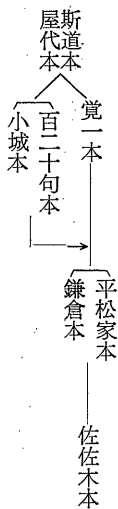
④ 高橋博士は「佐佐木博士旧藏平家物語について」（前掲）中で、

菖蒲前事は、源平盛衰記卷十六、菖蒲前事にもとづくものである。盛衰記の文と本書との間には詞章の一致する所は殆どないので、本書が盛衰記によりて書かれたとしても全く新しい詞章で、太平記は本書によりて書かれたことが明白である。

と記される。

⑤ 山下氏は『平家物語研究序説』（昭和四十七年三月、

明治書院刊）中で、この巻四の鶴説話に関する限り、諸本の関係は、



とされ、（中略）さらに、

この系統図には、まだまだ疑問の余地があり、今後更に修正を加える必要があるが、上述した所から、当類諸本の中、斯道本、佐佐木本、小城本の三本が屋代本に次ぐ古態を伝えているものと思われる。

と記される。

なお同書二六一頁に、『近衛院の時、当座の御会に「深山木」と詠み、人々を感じしむ』記事が『覚一本×』とあるのは誤りである。

（文学研究科修士課程修了・国文学専攻）